部活の勧誘の仕方

拝啓、〇〇大学に入る新入生へ
「…はる…はる…はる…はる」
僕は飯田春次。こう見えて(見えないけども)二回生です。
なぜ、ひたすらこの言葉を連呼しているかって？　そりゃ、こっちが聞きたいほどさ。
「やあ、飯田くん！　『はる』だねぇ？」
「ラリゴ先輩！」
彼は将棋部の部長。通称、ラリゴ先輩。容姿がすごくごっつくて、毛深くて……要するにゴリラみたいなんです。（文化系のクラブに入ってるのが信じられない）しかも知能もゴリラなみで(よく、この大学通ったな……)ニックネームも、先輩の友達が決めたんらしいけど、逆からよんだら人権問題になるはずなのに本人は一切気付いてないとか……
「飯田くん、『はる』だねぇ」
「……ラリゴ先輩、その言葉、二回目です……あんまりからかわないでください。俺、今、人生で稀なぐらい緊張しているんですから」
「ははは、またまた冗談を～……君、そんなにチェリーボーイだったかい？」
「……チェリーボーイも何も、この年でこんな事するの、正直言って嫌なんですよ！」
「アハハハ、あえてもう一度言わせて……飯田くん、『はる』だねぇ」
「(……たくっ、ふざけんな、誰のせいだと思ってんだよ。ヘラヘラとしやがって……)」

＊＊＊

一昨日の部会。
「はあーもう新入生が入って来るのか……あっという間だな、大学生活……」
「飯田くん、この時期に大事なのはハリだよ、ハ・リ。」
「ゴリ……ラリゴ先輩……『はり』ですか？」
「……そうだ。男なら、突っ張りだよ」
「(相撲部じゃ、あるまいし……)はあ……？」
「で、だ。コレだよ、コレ。」
「何ですかこれ……しんにゅうせいぼしゅう？　……新入生にビラ配りですか？」
「かーっ！」
「！」
「飯田くん、甘過ぎだ！　そんなありきたりな勧誘なら新入生は入って来んぞ！」

「はあ……？」
「まったく、これだから最近の若者は……『はる』んだよ」
「……？」
「つまりだな、気付かれないように、いろんな人の背中にビラを『貼って』他のサークルや部より一際、目立たせるんだよ」
「……それってただの小学生じみたイタズラじゃないですか……(しかも、突っ張りは何処にいったんだ……？)」
「何を言っているんだ、飯田君。将棋部では毎年恒例の行事だぞ？。」
「へー初耳です。……(去年、そんなの見たことねーよ)」
「……でだ、今年の実行者がくじ引きで君に決まったんだよ。良かったねー。僕もやりたかったよ」
「！　……交代しますよ、そんなの……てか、やりません」
「ふぅー……君、何も知らないのかい？　毎年、この行事を実行しない人は退部なんだよ？」
「えぇ！　退部？　そんな、無茶苦茶な……」
「よくある罰則だな。安心したまえ。毎年のようにしているから、学術会からも呆れられて大して怒られなくなったからな」
「どこに安心する要素があるんですかっ！　大体、ありませんよ、そんな罰則、普通！　先輩、こんなくだらない嫌がらせやめましょうよ！」
「フフフ……見てよ、このビラ。どこに貼っても見やすいようにカラーにしたんだ」
「……聞いてないし（なんの後輩いじめだ？　コレ？）」
「じゃあ、よろしくねぇ♪」
「……」

＊＊＊

……というわけで、今、まさに俺は先輩達が決めた無茶ぶりな行動を実行しようとしている。
俺はどこぞの先輩と違って一回生の間にして将棋大会で賞をいくつか貰った。だから今更、将棋部をやめるわけにはいかない。俺の選択肢は一つしかなかった。
狙う相手はもう決まっている。今、掲示板をまじまじと見つめている新入生である。何かに気を取られている人ほど狙いやすいものはない。しかも相手は入りたてであまり見慣れていない新しいものに浮かれている。明らかにチャンスだ。今、俺は被害者となる相手との距離は十五ｍある。
「よしっ！」
「行ってらっしゃーい♪」
「(この先輩、いつか動物園に引渡しに行きたい……)」

……十五ｍ……七ｍ……徐々に近づく。
新入生は振り向こうともせずに、掲示板を見ている。
距離は縮まっていく。五ｍ……三ｍ……俺は手にもっているビラを構える。
ビラを『はる』作業を終えたら何食わぬ顔して通り過ぎるつもりだ。
二ｍ……一ｍ……
……
……
……。
……案外簡単に貼ることができた。
これで、ひとまず、退部は免れる。
俺は心情ホッとして、歩いてきた道をゆっくりと振り返る。
新入生は気づかないまま、掲示板から離れて、俺がいる方向とは逆の方向へと歩いていく。
将棋部と書かれたカラーの派手なビラがヒラヒラと新入生の背中で揺れている。
しばらくは見せ物になるだろうから、本当に気の毒だ。俺だったら、絶対に被害者側にはなりたくないな。と、ふと考えた。だったら、今更になって思う。やる側はまだマシだと。
「さてと、とりあえず、部室に戻ろうか……」
「相変わらず、毎年恒例でほんと、しょうもない事してんな。将棋部。」
「！」
振り向くとそこに学術会の会長がいた。
「ちょっと、一緒に来てもらおうか？」
このあと、学術会から『軽い』お叱りがあったのは当然の事である。

＊＊＊

拝啓、〇〇大学に入る新入生へ。
新入生に俺が言いたいことがあります
一つ目は、将棋部に入部しない人以外は、サークルや机だしをしている期間は背中には気を付けてください。
きっと、来年の将棋部の犠牲者が隙のあるあなたの後ろを狙ってます。
最後にもう一つ、うちの将棋部は変なやらせがあります。あまり、入部はオススメできません。
じゃあ、なんで俺が将棋部にいるかって？　それはきっと、俺も変人だからだと思います。
もし、こんな話を聞いても来てくれるのなら、そりゃもう大歓迎で引き入れますよ。
ただし、来年の犠牲者は確実に君で決定だろうけどね。

おわり